

立命化友会ニュース

＝ 第 1 号 ＝

発行日: 2012 年 11 月 1 日

編集: 立命化友会事務局

編集責任者: 金 川 義 孝

〒525-8577

滋賀県草津市野路東 1-1-1

立命館大学 生命科学部・

薬学部 事務室内

TEL.077-561-2658

FAX.077-561-2659

e-mail:kayukai@st.ritsumeai.ac.jp

「立命化友会」発足

会 長 北 尾 舒 彦

(昭和三十九年卒)



友会の初代会長に就任致すこととなりしました。

微力ではございますが、過去の同窓会の流れを継承し、新たな同窓会の発展に尽力してまいりたいと存じますので、皆様のご指導・ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。

深秋の候、会員の皆様におかれましては、ご壮健にてお過ごしのことと拝察いたし、お喜び申し上げます。

また、設立総会では、会則や平成二十三年度の事業計画・予算案なども決定されました。

また、日頃は立命化友会の運営につきまして格別のご支援・ご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

会則は、応化会とほとんど同じです。役員及び平成二十四年度の事業計画・予算案について、別途掲載致しますので、御覧下さい。

さて、皆様ご存じの通り、昨年十月十六日に立命館大学生命科学部の同窓会の設立総会が開催され、その名称を「立命化友会」とすることが決定されました。

立命化友会の主催事業としては次のものを予定しています。

○ 総会 (三年毎の開催)

○ 常任幹事会 (随時開催)

○ 幹事会 (年に二・三回)

○ 各種委員会

・ 企画運営委員会

・ ニュース編集委員会

○ 支部活動

・ 関東・東海

・ 中国・四国

○ 立命化友会ニュース発行

(年一回 十一月)

○ セミナーの開催

・ 健康セミナー (二月)

○ 同好会活動

・ ゴルフ ・ ハイキング

・ 釣り天狗クラブ

・ 温泉研究会

(同好会活動については、広報のみ当会事務局が行ない、各事業の費用はすべて参加者の負担となっています。)

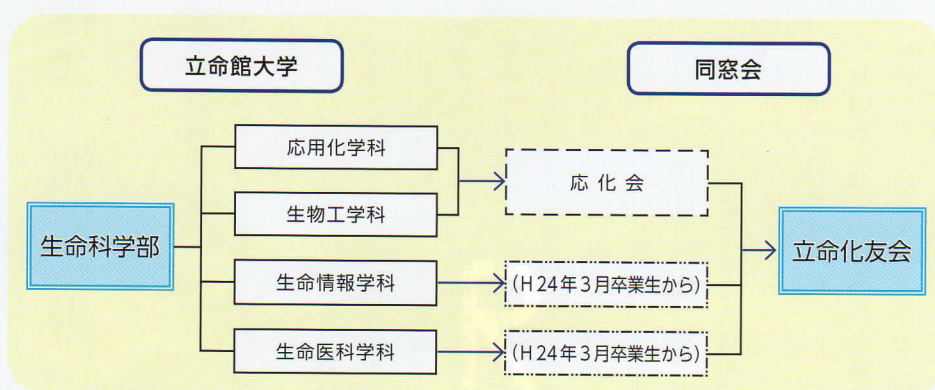
立命化友会の活動に関心を持っていただいて、当会の諸事業に多くの方々に参加される様に願っています。

また、当会の会員数は一万人を超えています。全国に住んでおられるので、インターネットをもつと活用して、ホームページによる広報活動や住所変更手続きの可能性も検討したいと考えています。

現在は若年層の方々の活動への参加が少ないので、何らかの有効な方策を模索中であります。

今回の立命化友会の設立を機として、多くの若年層の会員の皆様に役員になっていただき、過去の活動の良い所は残しつつ、自由な発想で新しい企画が実施出来れば良いと願っています。

最後に立命化友会の皆様のご健康と益々のご発展をお祈り申し上げます。



生命科学部の近況報告

生命科学部長 今 中 忠 行

立命化友会の皆様、こんにちは。
この場を借りて立命館大学と生命科学部・生命科学研究科の近況についてご報告させていただきます。

工系の拡充を目指して理工新棟が計画されています。

二、生命科学部について

二〇一二年四月、総合理工学院が解体され、また生命科学部と薬学部が分離しました。この措置に伴い、理工学部、情報理工学部、生命科学部、および薬学部が、それぞれの学部で責任を持って教育研究を行い、また学部運営をすることとなりました。

一、立命館大学について
ご存知のように、立命館大学は、昨年（二〇一一年）JR茨木駅近傍のサッポロビル跡地を購入し、二〇一五年度から大阪茨木キャンパス（OIC）が開設され、経営学部、政策科学部や一部の研究科が移転することが決定しています。これと関連して京都衣笠キャンパスの狭隘化の解消やびわこくさつキャンパス（BKC）の再整備が計画されています。BKCでは留学生用のインターナショナルハウスが完成しましたし、正門近くに大型プールを含むアリーナが建設される予定です。また理

生命科学部には四学科（応用化学科、生物工学科、生命情報学科、生命医科学科）がありますが、学部設置（二〇〇八年四月）から今年（二〇一二年）の三月で完成年度を迎えました。このような状況下で、教学課題の整理が不可欠であり、これらの課題を早急に解決していく必要があると思われる。

三、生命科学研究科について

四月から大学院である生命科学研究科（博士課程前期課程及び後期課程）がスタートしました。本研究科は生命科学専攻で構成され、四コース制（応用化学コース、生物工学コース、生命情報学コース、生命医科学コース）を採っています。現在の立命館大学は、大学院を充実させた研究重視の姿勢を強調していきますので、本研究科も研究力を強化し、グローバルな展開を図らなければならないと考えています。

四、今後の展望

上述のように全学的なキャンパス整備が行われる予定ですから、生命科学部として、今後の三〇〇五〇年を見据えた学部・大学院の将来構想について方向性を明確に打ち出していかなければならないと考えています。現在、その内容について学部で真剣な議論が行われていまずので、その結果は次回同窓会ニュースでご紹介できるようになるでしょう。

以上

立命化友会設立総会 開催報告

総会での議事内容

一、立命館大学生命科学部同窓会設立に関する件



二〇一一年十月十六日（日）十三時三十分より、立命館大学BKCキャンパス、コアステーション二階大会議室に於いて、立命化友会の設立総会が開催された。

既存の応化会は昭和十年代からの卒業生を擁する長い歴史を持つ同窓会であるが、数十年を経て、今日新学部の卒業生と合体した新たな同窓会が生まれる記念の総会に多数の関係者が参加した。

この総会開催に向けては、応化会と学内の同窓会準備委員会との間で種々調整を行い、合意に至った段階で、設立準備世話人会を設け当日の設立総会に向けた具体的作業が行なわれてきた。

設立準備世話人会より、新設学部である生命科学部（応用化学科、生物工学科、生命情報学科、生命医科学科）の最初の卒業生を輩出するこの時期に合わせて同窓会の設立を準備してきた事の説明があった。そして生命科学部四学科で一つの同窓会を設立し、そこに既存の同窓会である応化会が合流することの提案がなされ、了承された。

二、会則および名称の件

会則および本同窓会の名称について設立準備世話人会から原案の説明があり、原案を了承し同窓会の名称を「立命化友会」とすることとした。続いて会長として北尾舒彦氏を選出した。

三、役員および委員会

北尾舒彦氏（昭和三十九年化学科卒業）を議長として、会則にある各種役員の選出を議論した。まず副会長、会計監査、顧問、常任幹事について選出原案の紹

介があり承認された。名誉会員については旧応化会の名誉会員を引き継ぎつつ今後常任幹事会で検討することとした。庶務幹事と会計幹事は今後事務局で学会員を中心に検討することとした。

なおこれまで応化会で設置されていた名簿管理委員会と地域別活動委員会については委員会としては設置せずに、状況を見て個別対応することとした。企画運営委員会、ニュース編集委員会には設置することとした。

四、事業計画・予算について
事業計画案および予算案について説明がありました。また会費は終身会費を一万円とすることとした。旧応化会三支部については各支部で判断いただいて継続することとした。

記念式典

総会終了後同会場で記念式典が開催された。まず、初代会長に就任された北尾舒彦氏より挨拶があり、続いて校友会本部副会長西村隆氏と薬学部長今村信孝氏より祝辞を頂いた。また校友会他からの祝電があり紹介の上式典の前半を終了した。

記念講演会

引き続き同会場で、立命化友会会員でもある生命科学部長今中忠行氏により「第四十六次南極地域観測隊に参加して」という演題で講演が行われた。演題通り今中氏が実際に南極に滞在された時、また南極へ行くまでの内地訓練や「しらせ」での生活など、観測隊員としての貴重な体験と南極での微生物についてお話し頂き、参加者一同興味深く拝聴した。

懇親会

記念式典終了後会場を学内のリンクスクエア食堂（生協食堂）に移して懇親会が開催された。ほぼ全員が参加し二時間あまりにわたって和やかに親睦を深めた。



設立総会記念講演

第四十六次南極地域観測隊に

参加して

立命館大学生命科学部
生物工学科 今中忠行

一、はじめに

二〇〇四年十一月二十八日に成田を発ちオーストラリアのシドニー、パースを経由して、十二月三日に砕氷艦「しらせ」（写真①）が南極向けフリーマントルを出航した。しらせ艦内では往路で「しらせ大学」、耐寒訓練などの各種行事があり、復路では「南極大学」や船舶観測が行われた。しらせでは海水の風呂や激しい揺れなどもあったが、無事に乗り越えることができた。私も生物班員として約二ヶ月に及ぶ野外活動を行うとともに、二つの洋上大学で学長を務めシドニーへ帰還するまで楽しい経験をしてきた。その中で面白いと思った事柄（気象や研究）について簡単に述べてみたい。



① 砕氷艦「しらせ」

二、南極の気象

南極では氷点下の風が吹くことは日常である。通常、手袋をしていれば問題はないのだが、細かい手作業が必要な時は手袋をはずすことになる。寒い、冷たいを通り

超して痛いと感じる。昭和基地と沿岸部の夏はこの程度だが、ドームふじではマイナス四〇度からマイナス八〇度であり、ここでは常に凍傷の危険に曝されるという。また紫外線の強さも尋常ではない。サングラスをかけないと、たちどころに雪目になり目をやられる。実際、池の中の藻類でも表面は紫外線の影響で死滅して菌殻を形成し、その裏に緑色の元気な藻類が生えているほどである。また気圧も平均して九八〇ヘクトパスカルと低い。また砂塵の脅威も予想以上にすごいと感じた。ヘリコプターの離発着時に巻き上がる砂塵はテントや鞆の中へも大量に入り込んでくる。要するに空気に乗って侵入するのだ。南極には雲母が多く存在しているが、この微小片が空气中に浮遊し太陽の光を浴びてキラキラと輝いている。これがパソコンやデジタルカメラの大敵になっている。実際にカメラが作動しなくなった例もあった。私はこれらを密封式のプラスチック袋に入れて携帯しているほどである。もう一つ大きな特徴は白夜である。午前〇時でも太陽が沈まない世界はやはり特殊環境である。一月十九日から日の出と日の入り

情報が出されるようになったがこれは夏の終わりと秋の到来を感じさせる。二月に入り暗夜の時期になるとオーロラが現れる。オーロラはギリシャ神話で夜明けを告げる女神だそうだが、その色合いも多様である。緑色が濃いものから白色がかった緑もあるし、粒子のエネルギーが強くなると赤いオーロラも出てくることもある。その形も変化に富んでいるが、典型的なものは薄いレースのカーテンが風にゆらけているように見える。また南極の天候は時として急変することがある。特に野外では予備食料の準備やテント、寝袋は欠かせないが、気象予報の重要性と有難さも強調しておきたい。

三、南極での野外研究

野外では最初にランドボークスヘッタへ降り立った。雪と氷の世界だが、陸地は岩石が露出している(写真②)。日本では植物由来の土が地面を覆っているが、ここ南極では植物が生育していないので地肌が露出しているのだ。一見して岩の色や、岩石の混合具合が分かる。まさに地学研究の最適地であるといえよう。また山歩きでゴム長靴を履いていたのだが、小さな



② 大自然

砂や泥が無いために、急な斜面でも楽々と歩くことができた。またスカルプスネスでは特に岩石の風化が目立ち、造形芸術のような自然の岩があちこちに散らばっていた。温度変化でひびが入り、水、風、砂などで大きな穴や空洞ができるのであろう。もう一つ特徴をあげれば地磁気であろう。南極点とS極が一致していないため、コンパスの使用では一定の補正が必要である。ちなみに今年の昭和基地周辺では四十九度の補正がなされていた。この磁力を感知する走磁性細菌も興味ある研究対象である。

今度の旅で、地球は世界と繋が

り柔らかいということを実感した。二〇〇四年十二月二十六日に起きたインドネシアのスマトラ沖地震の影響を、南極大陸の地震計や南極海の深海底四六〇〇Mに設置した圧力計がしっかりと記録していた。また約八〇〇年前には海水に覆われていた南極大陸の一部が、氷床の融解で重しの役目が少なくなり三〇M程隆起したという。

また南極には多様な湖沼があるのも特徴の一つだろう。氷床が溶けてできた淡水湖もあれば、以前は海であったが今は湖となった塩湖もある。塩類濃度も低塩、中塩に加えて飽和状態の高塩湖もある。またそれぞれの環境に適した微生物も探索してみたいものである。沢山の湖で湖底の試料を円筒状の装置で採取した。最大四メートル近くまでコアを採取できた例もあるが、きれいな縮模様が見られた。大昔の堆積物ほど底深く眠っていたのであるから、湖底は歴史博物館であると言うこともできる。また湖にはラン藻やコケが多く見受けられた。特にスカルプスネスのある池ではコケボウス(コケの大きな固まり)が湖底で美しい別世界を形成していた。またラン藻のたくましい生命力にも驚かされる。



③ ペンギンの営巣地

白い岩石の隙間にも緑色のラン藻が元気に生きているのだが、これは強い紫外線を避けながら弱い光を吸収し、空気中の水分と炭酸ガス、窒素を利用して生きている。

一方、夏は鳥類の繁殖期でもある。ペンギンの営巣地では二羽の子供を大切に育てている親が微笑ましい(写真③)。灰色の柔らか

い毛に覆われているが、やがて抜け落ちると下から黒い燕尾服が現れる。雪鳥や南極トウゾクカモメもかわいいヒナを育てていた。特にカモメは人間を威嚇するように飛んで来て怖い位であった。一方、海岸や湖岸でアザラシの死骸を多

数見た。中には化石もあるようだが、生まれる生命と死んで行く生物の宿命を実感した。また南極の海岸には南極月貝や南極ソトオリ貝がいるが、その貝殻はいずれも極めて薄い。低温で合成能力が遅いのか溶解が早いのか分からないが、天敵が少ないので身を護る必要性が低いのかもしれない。

四、おわりに

最後にヘリコプターの有用性について触れておきたい。我々は海上自衛艦しらせのヘリコプター二機と観測隊ヘリコプター(愛称リトルブルー)で人員や物資の輸送をして頂いた。滑走路が無くせまい場所でも前後左右に機動的に動くヘリコプターは南極でのエースである。これなくして野外観測はありえない。感謝の気持ちを添えて本原稿を終わりにしたいと思う。

(本稿は、設立総会記念講演の内容をまとめたものです。)

白血病からがんについて考える

生命科学部 生命医科学科

堀 利 行



がんには胃癌や白血病などさまざまな種類がありますが、すべてのがんは、調節を逸脱して増殖する一つの異常細胞に由来することが分かっています。そのような細胞が分裂を繰り返して大きな細胞集団となり周りの細胞や組織を圧排し危害を加えるようになったものががんです。細胞が分裂を続けることは、生命誕生以来の生物の最も根源的な性質です。細菌のような単細胞生物でそのことは自明ですが、われわれ人間を含む多細胞生物でも、個体発生、組織の恒常性維持、そして生殖には細胞分裂が必須です。一方で、多細胞生物は、体全体の調和を保つために細胞の増殖を厳密に制御する仕組みを進化させてきました。しかし、それは後で付け加わったものであり、細胞が死なずに何らかの原因でその機能だけを失うことが起こります。そうすると、無制限に増えようとする細胞本来の性質が露呈するのを避けることができません。何故がんが生じると言え

ば、ある種の遺伝子変異によって単細胞生物以来の最も基本的な細胞のあり方に戻ってしまうからと考えられます。

がんは、年齢を重ねるにつれて発症頻度が高くなります。一九五〇年代にフィンランド生まれの統計学者Nordlingはがんの死亡率と年齢の間にべき乗則の関係があることを示し、ランダムなDNAの変異が蓄積することによってがんが発症するという仮説を唱えました。その後、一九七一年に米国の遺伝学者Knudsonは、稀な眼の腫瘍である網膜芽細胞腫について、ある遺伝子が両方の相同染色体で変異した場合に発症する

という仮説を発表しました。一九七〇年代後半には細胞のがん化を引き起こすがん遺伝子が発見され、遺伝子レベルでの研究が盛んになりました。がん遺伝子には多くの種類がありますが、いずれも細胞内のシグナル伝達に関わり、しかも、細胞の増殖や不死化を促進するように作用するタンパク質をコードしています。活性型のがん遺伝子は遺伝学的に優性の性質を示し、一對の相同染色体のうち片方で発現するだけで細胞はがん化しやすくなります。それに對して、一九八六年に単離された網膜芽細胞腫の原因遺伝子Rbは、Knudsonの予言通り劣性の性質を示し、両方の染色体で欠損または変異した場合に細胞のがん化を起こします。Rbのような遺伝子は、がん抑制遺伝子と呼ばれ、多くの種類が知られていますが、いずれもがん遺伝子とは逆の作用、すなわち、細胞の増殖を抑制したり、細胞死（アポトーシス）を誘導したりします。

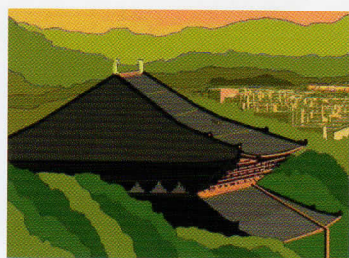
今日、がんが出来るまでのプロセスは次のように考えられています。まず一個の細胞のがん関連遺伝子（がん遺伝子またはがん抑制遺伝子）に変異が起こり、そのクローン（一個の細胞由来の集団）が増大する。その中にさらに別の

がん関連遺伝子の変異が加って周りの細胞より生存しないしは増殖に有利な性質をもった細胞が出現してそのクローンが多数を占めるようになる。そして、場合によってはさらにその細胞集団の中に別の第三、第四のがん関連遺伝子の変異によってさらに悪性度の高い細胞が生まれる。このように長い時間経過の間に複数のDNAの変異が蓄積した結果、その中で最も増殖が速く死に難いクローンが選ばれて最終的にがん病変を形成するに至るといふものです。

白血病の分子標的治療の話をしてようとして前置きが長くなつてしまいました。大急ぎで、慢性骨髄生白血病に対する治療の現状を紹介しようと思います。この病気の特徴は、染色体転座により生じたBCR-ABL融合遺伝子という一つのがん遺伝子が原因だということです。そのタンパク質産物がチロシンリン酸化酵素の活性をもち細胞のがん化過程において中心的な役割を果たしていることが明らかにされました。一九九〇年代にこの酵素の触媒ドメインの立体構造を解析しそこへのATPの結合を阻害するいくつかの候補分子がデザインされました。そして、

多くの試行錯誤を経て、チロシンリン酸化酵素阻害薬メシル酸イマチニブが開発されました。この薬を投与すると、BCR-ABL陽性の細胞は増殖を停止し、アポトーシスを起こして死滅するが、正常の細胞にはあまり大きな副作用は見られません。この薬は二〇〇一年にわが国でも認可されて広く臨床で使われ、第一選択薬の地位を確立しました。今日では、それに続く第二世代のチロシンリン酸化酵素阻害薬がさらにより治療成績を収めつつあります。他の白血病やがんの多様ながん化のプロセスを考えるとこのような成功例はむしろ例外と見なした方がよいのかもしれませんが、遠回りのようであっても、個々のがんについて原因となっているシグナル伝達経路の異常を明らかにすることが、がん克服への近道であること

を示していると思われま



立命化友会ニユース創刊に寄せて

立命館大学名誉教授

鈴木 啓 三



二〇〇八年に生命科学部と薬学部が誕生し、立命館大学生命科学部同窓会が設立されました。

この新しい立命化友会ニユース創刊号に執筆させて頂くことになり、大へんありがたく思っています。

応化会創立二〇周年記念誌（二〇〇四年）にも書きましたが、一九七九年ころ二人の化学科卒業生が訪ねてきて、「私たちが卒業研究の指導をうけた先生がお辞めになり、専攻した科目の研究室もなくなつて大変さびしい思いをしている」と話しました。当時、卒研単位で同窓会をもっているところもありましたが、化学科全体の同窓会組織があれば、このような問題は解決されるのではないかと考え、二、三の方々にご相談しました。

そのことがきっかけとなつて、一九八三年、吉田巖氏を会長とする卒研単位化学科の同窓会組織が統合

して化学科同窓会の名称で発足しました。

一九九四年、理工学部発祥の地衣笠学舎からびわこ・くさつキャンパスに学舎を移し、教育・研究に係わる環境整備と設備の拡充が図られました。この移転に伴つて応用化学系に生物工学科が新設され、これに合せて化学科同窓会の名称も応化会に変わりました。

ところで、私が立命館大学理工学部の助教授に就任したのは、一九五五年九月だったので、卒研指導は翌五六年からになりました。

私は京都大学の学部・大学院時代を通じて、心の中に今でいう生命科学への诗情のようなものが育つていました。そこで、それまでに身につけた高压技術を生かして、高压力下におけるタンパク質の研究に着手し、一九五七年度の卒業研究の一つ、「Thermal Denaturation of Egg Albumin under Moderate Pressure」を立命館大学理工研紀要第三号（一九五八年）に掲載することが出来ました。この論文は、米国プリンストン大学化学教室のカウツマン教授の注目を引きました。

ちょうどその頃、カウツマン教授と親しいプリンストン大学生物学教

室のジョンソン教授に京都でお会いするという幸運に恵まれました。ジョンソン教授は「高压力下における生物研究」の創始者です。このジョンソン教授こそ、一九六〇年フルブライト奨学生の下村脩博士（二〇〇八年、ノーベル化学賞受賞者）に「オワンクラゲ発光」のテーマを与えたその人です。

これらのことが契機になつて、私は一九六四年三月から一年間、プリンストン大学化学教室客員研究員としてカウツマン教授の下で研究することになりました。

私はプリンストンに滞在中に、研究教育面は勿論のこと、同窓会組織について多くのことを学びました。

大学正門を入ると、本館玄関前の左右に大学を象徴する虎の像が据えられています。カウツマン教授は、私の着任早々に、この建物の玄関に私と妻を案内されました。

四方の壁面には、太平洋戦争で戦没されたプリンストン大学の全卒業生の名前がぎっしりと刻み込まれた銅板が、はめ込まれていました。彼は「済んでしまったことは、どうしようもない。二度とこういうことが起きないようにしよう」と、話されました。私は大学と卒業生との間の信頼関係の強固な絆に深い感動をおぼえずにはいられませんでした。

また、六月の卒業式の後に、同窓会と学校当局が一体となつて繰り広げるホーム・カミング・デイ、お祭りの行事にも圧倒されました。卒業年次ごとに思い思いの衣装を身につ

けた大バレード。檻に入れた生きた虎を引いて参加している年次や、鯉幟を手手に持った日本に駐留していた年次もありました。プリンストンは人口二万の小さな大学町ですが、当日は街全体がホーム・カミング・デイ一色に塗りつぶされます。

私は、清新の気が漲る立命化友会が、新しい生命科学部と薬学部が手をたずさえ、共に発展していただくよう支援すること祈つてやみません。立命館大学は、キャンパスが幾つかに分かれているので、大学全体としてのホーム・カミング・デイを統一しにくい状況にあります。そこで立命化友会が他学部の同窓会と協力して、BKCの事務局を巻き込み、立命館・草津・琵琶湖祭りを展開する労を取られてはと期待しています。

この文を終わるにあたって、最近の私の生命科学への取り組みを紹介させていただきます。

「物質はいつ、生きたものになるのか？（生きものでないもの）」と（生きもの）の狭間に、何があるのか？」

この問いは、自然哲学者の故西川富雄・立命館大学名誉教授が私に寄せられたものです。本にまとめる作業が遅れていましたが、最近やっと目処がついてきました。

「第一章 自然」では、日本人ノーベル賞化学者らと生物物理化学者である私のプロフィールを紹介することで、化学者が抱く自然像を多角的に描きました。

「第二章 もの」では、天然物と人工物を取り上げ、ものとは何かの理

解を深めるように努めました。葉は格好のものです。遺伝子操作と原子核操作によって出来てくるものについて、詳述しました。

「第三章 いのち」では、『葉っぱのフレディ』を化学の言葉で表したいと、植物の生理を深く知ることから、いのちの在り処を探りました。

ところで、生物もまた宇宙の一部ですから、自然を支配する大原理である熱力学の法則が、生物にも当てはまって当然です。生体は開いた流れ系で、食べものや呼吸などによってものとエネルギーを取り入れ、一方で排泄することで秩序の高い状態、いのちを保っているのです。

これだけでは、哲学的視野からの西川先生の問いにお応えできたわけではありません。道は遥か彼方に連なっています。元気を出して、探し求め歩き続けようと思っています。

最後に、応化会の発展にご尽力いただきました歴代会長、委員、幹事の皆様方に謝辞を述べ、立命化友会のご発展と、会員の皆様のご健勝をお祈りします。

「生命とは物の絶えざる流れ」という無常明かせしエーンハイマー

埋められて戻ることなき古里の海辺恋しも誰をか責めん

木漏れ日の地面に映す円それぞれに日食のすがた輝きており

化学の道から美の世界へ

宗廣 陽助

(昭和四十年卒)

私は渡辺明教室で谷口吉弘氏とは外国語で同クラスでした。卒業後は親しい先輩の居た西安女子短大の被服染織科で三年程度、助手をしてその間に父親の始めた「手織り紬作り」の仕事が自分に向いているかどうかゆくり考えれば良いと軽い気持ちでいました。が四回生になる直前、父が病に倒れ兵糧を断たれてしまいました。止むなく渡辺先生に相談して週三日間、鞍馬口の京都市染織試験場に通い「植物染料」をテーマにして何とかまとめ卒業したものです。その後四十数年間紬作り(主に着物)に明け暮れて現在に至っています。その後、半ば回復した父が新しく「紬織り、緋織り」と言う分野で初の人間国宝にまでなりましたが、私にはその才能、血の出るような努力共、遠く及ばないことと自覚しておりま



は手作業、肉体労働を伴うので大変でしたが今考えますとこの作業は誰にも頼れないので道を間違えることなく今日まで何とかやって来られました。もし私の残した仕事に価値があるとするならば四十数年間すべて自分の手を通し五万点以上の染織作品を世に出したことです。この記録は誰にも破れないと秘かに自負しております。一方その間少し余裕ができて来ましたので主に東南アジア各地を廻り「私に作り得ないような素晴らしい染色品を作っている人達はどこに生活をしているのだろう」、「どんな生活をしていたならあのような美しいものを作り出せるのだろうか」と言う点をテーマに歩き続け、その際手本になる主に古い染色品を持帰り仕事の参考にしました。現代の作品では型絵染の人間国宝、芹沢銈介先生以上のデザイナー、美的感覚の持主は存在し得ないと悟り先生の作品も併せて収集してきました。数年前この新旧の私の収集品が新聞社の目に止まり二年前から今年六月にかけ岐阜、島根、東京、愛知、京都の公立美術館で約二ヶ月づつ展示されることになりましたが、その間全国の多くの芹沢ファン、立命の同級生にも目にしていただけ特に京都文化博物館では二万数千人の入館者を迎え嬉しいと同時に私の第二の仕事の使命も一区切りつけたところです。一つ言えることは化学の解答は真実一つであるのに対して美術の答えは受取り方によって必ずしも一つでないことに難しさと面白さがあることを最近ようやく解るようになりました。

実りの多い秋を

迎えるために

谷口 彰

(昭和四十五年卒)



団塊の世代 真つただ中で育つた我々の殆んどが定年延長期間も終え、これから人生をどう生きてゆくのか思考錯誤の人も結構多そうである。私もその一人であるが、機会ある毎に『毎日どうしているの』と聞くのが半ば習慣になっている。返ってくる答えの殆んどが、家庭菜園、老人大学、国内外旅行でありそれでも時間を持て余しているという。中には趣味で始めたワイン造り、木彫り等がプロに近い腕前になっている者もいた。私は以下を重点に忙しい毎日を送っている。

一、会社人での単身赴任が長かったことも影響してか料理教室、そば打ち講座、更には歴史散歩、水彩スケッチ等月一回の開催にかかさず出席させて頂いている。今では道具を取り揃え、家庭でのそば打ちを楽しんでいる。それぞれの教室の共通項は、団塊世代が殆どでかつ女性が圧倒的に多い点である。男同士で話をしていると思う事は、過去の栄光を引きずってか自慢話をする人が結構多い。リタイアすると手柄話はほとんどにというのが永くお付き合いする基本ではないだろうか。

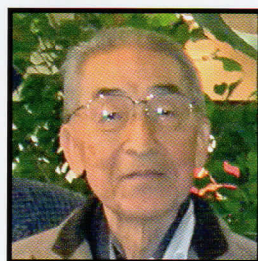
一、立命化友会同好会、特に釣り天狗クラブ、温泉研究会には積極的に参加させて頂いている。いずれも登録会員数は半端な数ではないが、いざ企画、案内、実施段階になると激減しているよう参加者はほぼ固定。数も二桁集まると良い方である。学年も違えば、見知らぬ大先輩もおられるという事で腰が引けるのは理解できるが、立命館で学んだ先輩、後輩という太い歴史的な絆があるので是非門を叩いてほしい。釣りも温泉研も共に色々とお世話いただく幹事様は、人間味があつて素晴らしい方々だと思つている。きっと新鮮な得難い人脈形成が出来る場であると信じている。

週刊朝日の名編集長だった扇谷正造は『一怒一老一笑一少』の言を好んだそうだ。一度怒れば一つ老い、一度笑えば一つ若返る。これからは気持ちだけでもいつまでも若くありたいと思つている。右の言葉を座右の銘に。

追悼

木村碩志 前会長を偲んで

松岡彦次（昭和二十七年卒）



五月十日、木村碩志君の奥様より直接の電話があり、木村君の死を知らされた。信じられない一瞬であった。去る二月十九日、立命OBの写真展に招かれ、その後、級友五人で食事を共に楽しんだ。その時の話題の中に「人間八十を過ぎれば何処かに故障が出て来るものである」それが、このような形で現実になるとは実に残念である。

かえりみれば彼とは、今から六十五年前の昭和二十二年、戦争の混乱が残る中、等持院の立命館専門学校理学科化学科に入學、昭和二十五年卒業、同年、新設された立命館大学理工学部化学科三回生に編入、昭和二十七年卒業迄の五年間、学生生活を共にした仲である。

彼は卒業後、更に京都大学薬学部大学院へ進み、有名な刈米先生に師事し、薬学博士号を取得したうえで、彼の祖父が創業された木村製薬（現アース製薬）に戻り同社の研究開発の責任者として取り組み、種々の実績をあげられたのである。なかでも有名な『ごきぶりホイホイ』の



商品化に当たっても、ごきぶりの種類、習性生態等を徹底的に研究調査し、それを基に捕獲器を作りあげ、国内はもとより、海外にまで輸出され、マスコミにも再三、取りあげられる人気商品となったのである。冒頭の奥様より、ご連絡を頂いた夜は、彼との数々の思い出が目に浮かび、正直なかなが寝付けなかったのを覚えている。学生時代、彼の京都の家に頻繁にお邪魔をし、歓迎して頂いたこと、更に、夏休みには赤穂海岸の別荘に長期滞在させて頂いたこと、又、北アルプス登山で危険を克服し、一緒に頑張ったことなど鮮明に浮かんた。その他にも、歌舞伎鑑賞、能楽（謡曲、仕舞、小鼓）の稽古も一緒にさせて頂いたのも彼の思い出の一頁である。結びに、木村碩志君は忙しい中、母校応化会の会長として会の発展に貢献され、感謝に堪えない。最後の赤穂の斎場では、沢山の有縁の人々に見送られ旅立たれたのである。心より、ご冥福をお祈りいたします。

追悼

松田二郎先生

小島一男（昭和五十二年卒）



「1985年3月撮影」

松田二郎先生が、二〇一二年三月十六日、八十六歳で亡くなられました。時折さみしくなります。

わけていたと思いますが、本学では酸化ガラスの電気物性、ガラス中の遷移金属イオンの光吸収、ゾルゲルガラスなどの研究をされました。コバルトイオンに因る澄んだ青紫色の、先生のご自慢のバイコールガラスが残っています。一九七〇年頃にイリノイ大学に留学された時の実験データを先生は退職一年前ごろ英語論文にまとめられました。それは、一九九一年の米国化学会の「The Journal of Physical Chemistry」に、アルカリホウ酸ガラス中のコバルトイオンの光吸収スペクトルに対する圧力効果の内容で掲載されています。

が、一方では衣笠の旧六号館四階の東向きの研究室に先生が今でも居られるような気がすることがあります。物質や現象は異なっている、先生の説明を聞くと、もとは同じところからきているのだと思つたことが何度もありました。そのように量子論など基礎を大切にされました。実験では、人のデータで判断するより、とにかく自分で測つてみるように言われました。先生は第五高等学校、京大理学部物理化学研究室のご出身で、愛媛大学などを経て、一九六四年十月に本学理工学部教授に就任し、無機化学研究室を担当されました。一九七八年度から二年間の理工学部長をはじめ、理工学研究所長、大学協議員、学部主事など要職を務められました。一九九一年の三月に定年退職され、四月に本学名誉教授になりました。本学着任以前はカルコゲンガラス他を扱

先生は花がお好きだったのでは。無機化学研究室で吉野へお花見に行ったことがありました。卒業式の日には決まって研究室メンバーを大学の西門を出て龍安寺に連れて行つていただきました。境内の遅咲きの梅や開花間近の桜に目を細めておられたものと思います。お宅に近い平等院の阿字池の藤の花が満開で美しいと研究室の同窓会誌「ぎやまん」に書かれています。松田二郎先生、先生は反骨精神を内に秘めた相当な紳士でしたと申し上げてもよろしいでしょうか。

本溶液中で生ずる光反応機構とは著しく異なり、或る波長では予想し得ない生成系を生ずる場合がある。その原因は、ガラスマトリックス部分の反応物質に対する遮蔽効果、cage effect、またはガラス自身に生ずる色中心が直接同様に第三成分の光反応に影響を及ぼしており、ハロゲン化銀、セリウムを含むホウ酸ガラスはこれ等ガラスの固有遮蔽としての性質を有する。

「松田二郎先生自筆論文原稿
窯業協会誌（1968年）」

温泉研究会の「碩学の長老」、故木村碩志氏

奥野年秀（昭和三十七年卒）



温泉研究会は平成二十二年秋に発足しました、発起人は木村碩志氏（元アース製薬常務取締役、昭和二十七年卒）と石井 猛氏（岡山理科大学名誉教授、昭和三十一年卒）であり、第一回総会（有馬温泉）、第二回総会（京都本能寺会館）で開催されてきましたが、本年五月十日に木村会長が急死されました。ここに謹んでお悔やみ申し上げます。木村氏は旧応化会会長や兵庫県立命館大学OB会幹事や趣味の分野でも大学の写真研究会創設など校友会のお世話をされてきました。又、会社では、開発本部長として「こきぶりホイホイ」等製品の開発に専念され、当社の研究所設置や発展に尽くされました。兵庫県赤穂市の地元では、青年会議所の創設に奔走され、初代理事長に就任されています。木村氏は立命館大学理工学部の修士課程を修

了された後に京都大学薬学部の博士課程や国立衛生試験所にて研究に従事されて京都大学から薬学博士を授与され、祖父の木村秀蔵氏が創立されたアース製薬で専門知識や研究成果を結実されました。兵庫県知事功労賞や兵庫県薬事協会賞等授与され、社会に尽くされた功績が賞賛されました。なお、今年の計画では、五月中旬に第三回総会（箱根湯本温泉）が開催される予定でした。しかし、木村会長の計報にて、総会が延期になり、企画立案して戴いた戸谷順造氏（昭和三十九年卒）も六月八日に急死され、この計画は白紙になりました。六月十三日に京都タワーホテルで開催された臨時の幹事会では、会長、副会長の人事や会則改正や新幹事の紹介が行われました。現在、一一〇名を超える会員数であり、関西方面の立命化友会の会員が多く、第三回総会は十一月に近畿圏で実施する予定です。木村会長の遺志を継いで温泉研究会を活性化致すべく、会員諸氏のご支援とご鞭撻をお願い致します。

支部だより

「いまやらねばいつできる」

（平櫛 田中 彫刻家）

関東支部長 仲宗根 宗 督（昭和三十五年卒）



「志をもつた堅心」
知友の日
立のデザイン
ナー氏を都
立多磨霊園
日本古代史、二十一年度は西田哲学を受講学位取得修了、本年度は現代社会学（韓国と北朝鮮と日本の関係）を受講中の学生です。早稲田大学の学友を含め、受講中の諸氏の「立命館」への評価は高く、期待も高まるばかりです。

の立命館学祖、西園寺公望公の墓を紹介の為同行した節に、平櫛田中公の墓にも立ち寄った次第ですが、田中の百才のメッセー

ジが表題の「いまやらねばいつできる」と自らの志を公表したことに同行のデザインナーは甚だしく感動し、「西園寺公望の『学然後足らざるを知る』と同様故人の『座右の銘』を業務や人生に生かすべきこと。」と発言されていたことを紹介させていただき

ます。次回は岡山大学客員教授（理学博士・国分寺在住）をご案内し意見交換することにしております。

悲報
当支部副支部長として永年在任され、温泉研究会にも多大な貢献をされておられた戸谷順造氏が先般急逝されました。心からお悔やみ申し上げて、近況報告いたします。

立命館への期待と役割

私は平成二十年から早稲田大学オープンカレッジを受講しており、平成二十年度は、

企画運営委員会報告

委員長 伴 野 清

(昭和四十二年卒)

日頃は皆様方の交流と親睦を図るための各種企画の運営にご協力をいただき有難うございます。

さて、今年度も幹事の方々にお世話いただき「ゴルフ懇親会」、「ハイキング」、「温泉研究会」および「釣り天狗クラブ」の活動が繰り広げられました。また、二月には恒例の「健康セミナー」を開催することができました。

ご周知のように本年四月からは、新たに立命化友会としての企画運営になっておりますが、それぞれの開催案内は、引き続き事務局からお送りしておりますので、参加ご希望の方は、お気軽に事務局までご一報下さい。

第六回健康セミナーの開催

平成二十四年二月二十六日(日)

京都タワーホテルにおいて「白血病からがんについて考える」と題し、立命館大学・生命科学部・生命医科学科の堀利行先生にご講演いただきました。

人口の高齢化とともに死因に占めるがん

の割合が増えている実情に鑑み、がんはどのような病気なのか、どのように発症するのかについて、血液のがんである白血病を例にとつて最近のトピックスを紹介していただきました。

今日では白血病を起こすほとんどすべての原因が、細胞の増殖や生死や分化を調節する遺伝子の変化であることが分かっているとのこと。また、最近では白血病の本体が、白血病細胞の中に少数含まれる白血病幹細胞であることが示され、それ以外の白血病細胞は自然に死んでいく細胞であり、恐れるに足らないということです。

堀先生は、医師として、また、日本内科学会や日本血液学会等の専門医として活躍の立場から、特異性の高い治療薬の状況がんの新しい診断法、治療法の可能性についても詳しくお話していただき、興味深く聴講させていただきました(詳細は本号五ページ)。

第二十七回 ゴルフ懇親会

平成二十三年十月二十六日(水)

幹事の三上正勝様・西村定様にお世話いただき、好天氣に恵まれた東城陽ゴルフクラブにおいて開催されました。当日は十名の方にご参加いただき、競技方法は新ペリアア式によるダブルペリアで行い、大杉義則様が優勝されました。おめでとうございます。

第二十三回 立命化友会ハイキング

平成二十三年十一月二十七日(日)

木全豊和様に幹事をお願いし、「木津川上流から笠置山」ハイキングが開催されました。参加者七名、加茂駅に集合し、大河原く飛鳥路く布目川く笠置山く笠置温泉の十kmのコースを散策し、京都で一番と言われる笠置温泉では、入浴と懇親会で大いに盛り上がりました。

温泉研究会第二回総会

平成二十三年十二月十六日(金)

京都市のホテル本能寺会館で総会・セミナー・懇親会が開催され、十四名の方々にご参加いただきました。総会では役員の承認や



温泉研究会 第2回総会

次回開催の候補地について、セミナーでは石井猛様、奥野年秀様、木村碩志様が講演を、その後、懇親会が催され、料理を楽しみつつ交流を図りました。

第二十八回 ゴルフ懇親会

平成二十四年三月三十日(金)



第28回 ゴルフ懇親会

三上正勝様・西村定様にお世話いただき、宇治カントリークラブで開催され、三上正勝様が優勝されました。おめでとうござい。今回は参加者六名と少し寂しくなりましたが、「続けることに意義あり」との言葉に励まされて、和気あいあいとラウンドできました。

次回は十月二十五日(木)に「日野ゴルフ倶楽部」で開催の予定です。

第二十四回 立命化友会ハイキング

平成二十四年四月二十九日(日)

温泉研究会臨時幹事会

平成二十四年六月十一日(月)

木全豊和様に幹事をお願いし、奈良・桜井駅からの「山の辺の道」ハイキングが開催されました。当日は快晴に恵まれ、参加者は十二名、金屋の石仏く大神神社く狭井神社く松原神社く景行天皇陵く崇神天皇陵く長岳寺く黒塚古墳のルートで、9kmを四時間かけて心地よい清風でウォーキング、懇親会で楽しく打ち上げができました。

次回は十一月に「南山の辺の道」を予定しています。

第三回 釣り天狗クラブ

平成二十四年五月十九日(土)

目片秀明様にお世話になり、泉南郡岬町小島沖で船釣り後、懇親会が開催されました。参加者六名の成果は、ガシラ、チャリコ、キスなど二十二匹と豪快、お待ちかねの懇親会は、豪華な船盛りで盛り上がりました。魚釣りが初めての方も次回はお気軽にぜひご参加下さい。



第24回 立命化友会ハイキング



第3回 釣り天狗クラブ

平成23年9月1日から平成24年8月31日の間に、ご逝去の連絡を頂いた方々です。
心よりご冥福をお祈り申し上げます。

物故者

近江源二郎 (昭18年卒)	漆原 昭雄 (昭26年卒)
安岸 俊男 (昭19年卒)	山田吉之介 (昭26年卒)
田中 丈夫 (昭19年卒)	野田 芳広 (昭26年卒)
中大路宏造 (昭20年卒)	木村 碩志 (昭27年卒)
戸田耕太郎 (昭20年卒)	根来 寛 (昭27年卒)
長谷川金市 (昭20年卒)	中川 三三 (昭28年卒)
中山 俊行 (昭20年卒)	福井 喜好 (昭29年卒)
大八木一光 (昭20年卒)	大溝 稔 (昭29年卒)
寺本 博 (昭22年卒)	田中 敬三 (昭30年卒)
石田 嘉陸 (昭22年卒)	大西 浩三 (昭30年卒)
伊藤喜八郎 (昭22年卒)	梶原 俊之 (昭31年卒)
並河賢一郎 (昭22年卒)	中部 賀正 (昭32年卒)
藤原 憲一 (昭22年卒)	都築 達司 (昭32年卒)
畑 実 (昭22年卒)	境 禎弘 (昭33年卒)
野々口善隆 (昭22年卒)	山口 雅之 (昭34年卒)
三浦 莊平 (昭22年卒)	榎本 梁雄 (昭36年卒)
内貴 信夫 (昭22年卒)	扇 孝三朗 (昭38年卒)
今井 昭三 (昭23年卒)	漆崎 雅巳 (昭38年卒)
及川 英夫 (昭23年卒)	西口 智 (昭38年卒)
吉田 源三 (昭23年卒)	戸谷 順造 (昭39年卒)
奥村 孝明 (昭23年卒)	池田 利和 (昭40年卒)
田中 宏和 (昭23年卒)	伊藤 卓 (昭42年卒)
玉井 清 (昭24年卒)	家田 壽一 (昭50年卒)
金田 浩 (昭24年卒)	三木 正樹 (昭55年卒)
佐々木重遠 (昭24年卒)	伊吹 和泰 (昭59年卒)
藤井 禄郎 (昭24年卒)	三原 弘次 (昭60年卒)
野々村 昇 (昭24年卒)	
櫻井清二郎 (昭25年卒)	土井 友一 (平7年卒)

(敬称略)

新任の先生から一言

いしみず たけし
石水 毅 先生



本年四月より生命科学部生物工学科に准教授として着任いたしました。専門は、タンパク質、糖質を扱う生化学です。植物糖鎖（細胞壁多糖、糖タンパク質糖鎖）の生合成・分解の分子機構を解明する研究を行っています。生命科学部の発展に貢献できるように、教育・研究に一層精進を致す所存です。皆様のご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

略歴 一九九三年 大阪大学理学部化学科卒業。一九九八年 大阪大学大学院理学研究科有機化学専攻修了。博士（理学）。一九九八年 日本学術振興会特別研究員（大阪大学蛋白質研究所およびペンシルバニア州立大学）。一九九九年 大阪大学大学院理学研究科助手および助教。二〇〇九年 同講師。二〇一二年 本学着任。

かたやま みさき
片山 真祥 先生



本年四月より生命科学部応用化学科助教として着任いたしました。現在はX線吸収分光を利用した電池材料の解析をテーマとして研究を進めています。本学SRセクターをはじめ大型放射光施設・次世代光源を利用した最先端測定技術の開発とその応用に興味を持っており、研究・教育を通じて応用化学科に貢献していきたいと考えております。よろしくお願い申し上げます。

略歴 二〇〇七年九月 立命館大学大学院理工学研究科総合理工学専攻博士課程後期課程修了。博士（理学）。二〇〇七年一〇月 立命館大学総合理工学研究機構 ポストドクトラルフェロー。二〇一二年四月 立命館大学生命科学部応用化学科 助教。

うめかわ みどり
梅川 碧里 先生



本年四月に生命科学部助教に着任致しました。専門分野は、酵素学、糖鎖生物学です。今後は、酵母を用いた糖質代謝関連酵素とその生理機能に関する研究を中心に進めていきたいと考えております。できるだけ多くの先生方、職員の方々、学生との出会い、関わりを大切に、研究と教育に頑張つていきたいと考えておりますので、皆様のご指導、ご鞭撻の程、宜しくお願い申し上げます。

略歴 二〇一〇年三月 京都大学大学院生命科学研究所 博士課程修了。博士（生命科学）。二〇一〇年四月〜二〇一二年三月 米国ミシガン大学ライフサイエンスインスティテュート博士研究員。二〇一二年四月 立命館大学生命科学部生物工学科 助教。

えだ しま
江田 志磨 先生



本年四月に生命科学部生物工学科の助教に着任致しました。専門は微生物の分子遺伝学です。学位取得後は動物病原細菌の薬剤耐性機構の研究をしていました。現在は、環境細菌や植物共生細菌における薬剤輸送タンパク質の機能について研究を進めています。至らない点も多くあるかと存じますが、ご指導ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

略歴 二〇〇〇年三月 筑波大学大学院博士課程農学研究科終了。博士（学術）。二〇〇〇年四月 東海大学医学部 博士研究員。二〇〇五年九月 東北大学大学院生命科学研究所 助教。二〇一〇年九月 東北大学大学院生命科学研究所 産学官連携研究員。二〇一二年四月 本学着任。

土屋 雄揮 先生
つちや ゆうき



本年四月より、生命科学部助手として着任致しました。専門は微生物生態学です。水中の石などの表面で微生物が形成している共同体「バイオフィルム」の諸性質や機能を研究しています。

本学の教育のお役に立てるよう精一杯努力する所存です。皆様のご指導・ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。

略歴 二〇一一年九月 立命館大学
大学院理工学研究科総合理工学専攻
攻博士後期課程修了、博士（理学）。
二〇一一年九月～二〇一二年三月
日本学術振興会特別研究員（DC2
からPDに資格変更）。二〇一二年
四月 立命館大学生命科学部 助手

工藤 雄博 先生
くどう かつひろ



本年七月より生命科学部生命医科学科助手として着任させていただきました。専門分野は食品機能性です。生命医科学科では食品の内容が少ないのですが、「薬食同源」、「医食同源」の観点から様々なお力添えができればと存じます。これまでに培ってきた様々な地域の様々な経験を学生たちに伝えていくよう邁進していく所存です。どうぞよろしくお願い申し上げます。

略歴 二〇〇六年三月 酪農学園大
学大学院酪農学研究科食品栄養科学
専攻修了、博士（食品栄養科学）。
二〇〇六年四月 北海道名寄農業高
等学校（現、名寄産業高等学校）期
限付き教員。
二〇〇七年四月 沖縄工業高等専門
学校生物資源工学科教員。二〇一二
年七月 本学着任。

川崎 崇 先生
かわさき たかし



本年の四月に薬学部助教として着任致しました。専門分野は、微生物が生産する生理活性物質の形成に関与する酵素・遺伝子の解析です。

以前、私は東京理科大学薬学部において、研究と教育に携わってきました。その経験を活かし本学での研究と教育に貢献できればと考えております。皆様のご指導、ご鞭撻の程、宜しくお願い致します。

略歴 二〇〇五年三月 富山県立大
学大学院 博士後期課程修了、博
士（工学）。二〇〇五年四月 東京
理科大学薬学部 嘱託助手・助教。
二〇一〇年四月 京都大学生存圏研
究所 研究員。二〇一一年四月 神
戸大学大学院農学研究科 研究員。
二〇一二年四月 本学薬学部に着任。

波多野 亮 先生
はたの りょう



本年四月より薬学部助教として着任致しました。腎臓におけるトランスポーターの生理的な役割の解析を専門に研究を行っております。一昨年度より本学での教育・研究に携わらせて頂いておりますが、改めて教員として関わっていくこととなり、より一層の責任感をもって取り組んでいきたいと思っております。皆様のご指導、ご鞭撻のほど宜しくお願い致します。

略歴 二〇〇二年 東北大学薬学部
卒業、薬剤師免許取得。二〇〇八年
東北大学大学院医学系研究科博士課
程修了 博士（医学）。二〇〇八年
大阪大学大学院医学系研究科 特任
研究員。二〇一〇年 立命館大学薬
学部 助手。二〇一一年 日本学術
振興会特別研究員（PD）。

立命化友会名誉会員 (敬称略)

立命化友会役員名簿 (敬称略)

石井 猛
岩崎 弘通
岡本 勇三
小野文一郎
河口 昭義
近藤 紘一
鈴木 啓三
高橋 玲爾
竹内 良夫
立木 隆
谷利 陸平
谷口 吉弘
土屋 正夫
中村 尚武
橋谷 博
林 眺
林 隆俊
深海 浩
松岡 政夫
松田十四夫
三代澤良明
山本 善史
吉田 真

顧問	会長	副会長	常任幹事
大原八十八 (30年)	北尾 舒彦 (39年)	金川 義孝 (39年)	岸 要 (25年)
田村弘三郎 (31年)	谷口 吉弘 (40年)	伴野 清 (42年)	上原 正巳 (34年)
北尾 舒彦 (39年)	北尾 舒彦 (39年)	北 泰行 (平20年着任)	松田十四夫 (38年)
木全 豊和 (40年)	中村 尚武 (41年)		西原駿一郎 (41年)
池田 昌彦 (42年)	篠原 長政 (43年)		酒井 芳夫 (44年)
木越 俊雄 (46年)	城戸 正憲 (46年)		松本 浩一 (51年)
前川 昭 (52年)	白井 総 (56年)		前辻 啓志 (59年)
目片 康人 (61年)	田口 肇 (62年)		小林 久人 (平2年)
目片 秀明 (平4年)	森崎 久雄 (平5年着任)		山田 佳博 (平9年)
矢野 成和 (平12年)			

会計監査	庶務幹事代表	会計幹事代表	学内幹事
谷口 直哉 (平15年)	荒木 武彦 (43年)	白石 晴樹 (47年)	藤田 典久 (51年)
長野 正道 (平15年着任)	澤村 精治 (49年)	小島 一男 (52年)	岡田 豊 (54年)
香山 彰朗 (31年)	加藤 稔 (院62年)	花崎 知則 (平1年)	北原 亮 (平9年)
民秋 均 (平5年着任)	今村 信孝 (平7年着任)	小堤 和彦 (平7年着任)	久保 幹 (平8年着任)
玉置 純 (平8年着任)	若山 守 (平11年着任)	高木 一好 (平12年着任)	笠原 賢洋 (平17年着任)
堤 治 (平19年着任)	今中 忠行 (平20年着任)	稲田 康宏 (平21年着任)	三原 久明 (平21年着任)
天野 晃 (平21年着任)	菊地 武司 (平16年着任)	高橋 卓也 (平15年着任)	野間 昭典 (平20年着任)
伊藤 将弘 (平16年着任)	寺内 一姫 (平21年着任)	里見 潤 (昭63年着任)	下妻晃二郎 (平19年着任)

▼年度幹事▼	専門学校
早野 俊哉 (平17年着任)	堀 利行 (平20年着任)
浅野 真司 (平16年着任)	池谷 幸信 (平20年着任)
一川 暢宏 (平19年着任)	稲津 哲也 (平21年着任)
岡野 友信 (平22年着任)	木村 富紀 (平19年着任)
鈴木 健二 (平15年着任)	高田 達之 (平20年着任)
谷浦 秀夫 (平21年着任)	土屋 友房 (平23年着任)
服部 尚樹 (平21年着任)	藤田 卓也 (平19年着任)
角本 幹夫 (平22年着任)	小池千恵子 (平21年着任)
藤田 隆司 (平22年着任)	石水 毅 (平24年着任)

新制大学	(二部化学科)	(二部化学科)
28年	九鬼 敏隆	八木 永治
29年	東 龍夫	片山治市郎
30年	廣瀬榮三郎	池田 茂
31年	上原 正巳	寺田 卓二
32年	藤井 博	天田 健治
33年	加納 修	岩崎 弘通
34年	松岡 彦次	八木 本
35年	彌宜田峰太郎	香山 彰朗
36年	岡本 朗	磯野(田村)喜美子
37年	花澤 明	佐々木 豊
38年	近藤 照雄	大谷 芳亨
39年	奥野 年秀	松尾 篤治
40年	松本 幹生	金川 義孝
41年	木全 豊和	東 正弘
42年	西原 駿一郎	

平 1年	63年	62年		61年	60年	59年	58年	57年		56年		55年		54年	53年	52年		51年	49年	48年		47年		46年	45年	44年		43年		42年		
大山	栗津	坂根	田口	目片	菊池	長谷川	野口	北河	片山	白井	松田	安田	松尾	坂本	岡田	川澤	河村	前川	久保田	松本	澤村	寺石	白石	宮地	城戸	木越	村上	長井	伊藤	篠原	伴野	野田
良隆	尚之	正恭	肇	康人	英知	圭一	剛	英次	勝隆	総	信之	哲	安蔵	隆	豊	吉雄	眞也	昭	和孝	浩一	精治	雅和	晴樹	淳	正憲	俊雄	俊男	広次	省二	長政	清	博之

16年	15年	14年	13年	12年		11年	10年	9年	8年	7年	6年	5年	4年		3年	2年																
加藤 豊	加瀬澤邦浩	水戸部敬子	原田 雅央	谷口 直哉	西田 悠里	網本恵美子	廣瀬 琢磨	籠橋福太郎	五十嵐亮介	矢野 成和	松宮 芳樹	宇野健二朗	山本 幸子	山田 修司	平本 豪志	小池 竜一	川中さやか	岩井 啓能	山田 佳博	武田 周子	岡部 直樹	磯貝 秀人	村山 公一	宮武 智弘	草野 富雄	尼川 雅章	北口 均	目片 秀明	中井 武裕	中村 俊博	桐村 寛	小林 久人

24年	21年
志茂 欣子	野田 悠太 濱口 直之 空閑 健透 小林 亮太 平田 俊輔

企画運営委員会
委員長 伴野 清 (42年)
副委員長 中村 尚武 (41年)
委員 木全 豊和 (40年)
木越 俊雄 (46年)
松本 浩一 (51年)
白井 総 (56年)
小林 久人 (平2年)
目片 秀明 (平4年)
前田 大光 (平16年着任)

ニュース編集委員会
委員長 金川 義孝 (39年)
副委員長 加藤 稔 (院62年)
委員 岸 要 (25年)
奥野 年秀 (37年)
城戸 正憲 (46年)
藤田 典久 (51年)
小島 一男 (52年)
目片 康人 (61年)
田口 肇 (62年)
玉置 純 (平8年着任)
高木 一好 (平12年着任)
笠原 賢洋 (平17年着任)

会員の

磯島文雄氏 (八十二歳) が

瑞宝単光章を受章

平成二十三年秋、磯島氏が叙勲受章をされました。おめでとうございます。磯島氏は昭和二十八年卒業後、警察鑑識課で覚醒剤や毒物の化学物質の微量分析に尽力されました。

お詫び

応化会ニュース第二十九号の物語者の記事で、高田満信様 (昭和四十六年卒) のお名前を誤って掲載してしまいました。高田様、並びに関係者の皆様には、大変ご迷惑をお掛け致しました。ここにお詫び申し上げ、訂正させていただきます。

事務局だより

事務局の担当者が七月より小西昌子から勝浦友子へ代わりました。又、事務局の開室日時も左記の通り変更となりましたのでよろしく願います。

月・水・金 九時〜十六時半

編集後記

昨年の秋、生命科学部同窓会設立総会が開催され「立命化友会」が誕生しました。そして立命化友会ニュース第一号の発刊を迎え、今後生命科学部の将来構想や生命体の神秘等の記事をお届けしたいと思っています。

今年にはロンドンオリンピックが開催され、我が国は三十八個のメダルを獲得しました。特に、女子の卓球・バレーボール・サッカー等の活躍は目覚ましい

ものでした。又、世紀の金環日食、東京スカイツリー開業等が感動を与えてくれました。一方欧州財政危機、原発事故、決められない政治等で景気は低迷多事多難の年でした。

「立命化友会」会員特に若年層の皆様、同好会 (ゴルフ・ハイキング・釣りクラブ・温泉研究会) や各支部活動に奮って参加し活動を一層盛り上げて下さい。

(金川)

応化会 2011 年度 (平成 23 年度) 事業報告

I. 諸事業

1) 2011 年 3 月卒業生名簿作成	2011 年	5 月 ~
2) 応化会ニュース (第 29 号) 発行	2011 年	11 月 1 日
3) 全会員への通信	2011 年	11 月
4) ゴルフ懇親会の開催		
・第 27 回	2011 年	10 月 26 日
・第 28 回	2012 年	3 月 30 日
5) 応化会ハイキングの開催		
・第 22 回	2011 年	5 月 22 日
・第 23 回	2011 年	11 月 27 日
6) 釣り天狗クラブ		
・第 3 回	天候により中止 (2011 年 11 月 19 日)	
7) 温泉研究会		
・幹事会	2011 年	6 月 23 日
・第 2 回 総会&セミナー	2011 年 12 月	16~17 日
8) 健康セミナー		
・第 6 回	2012 年	2 月 26 日

II. 諸会議

幹事会		
・第 1 回	2011 年	7 月 24 日
・第 2 回	2012 年	2 月 26 日
企画運営委員会		

応化会ニュース編集委員会		
・第 1 回	2011 年	6 月 25 日
・第 2 回	2011 年	9 月 11 日

III. 支部活動 (関東支部、東海支部、中国・四国支部)

関東支部幹事会	2011 年	11 月 24 日
---------	--------	-----------

2011 年度 (平成 23 年度) 応化会決算

一般会計

(単位: 円)

収入の部	予算額	執行額
前年度繰越金	3,691,705	3,691,705
会費 (一般)	50,000	50,000
会費 (学生)	0	0
寄付金	10,000	14,000
雑収入	5,000	384
合 計	3,756,705	3,756,089

支出の部	予算額	執行額
総会開催費	0	0
事業等補助金	200,000	27,280
地域別活動推進費	100,000	0
会議費	150,000	70,227
印刷費	400,000	397,024
郵送費	800,000	553,865
人件費	250,000	236,000
事務局費	25,000	57,165

雑費	100,000	0
拠出金 (特別会計へ)	0	0
拠出金 (連絡協議会へ)	0	0
在学生活動援助費	0	0
振込手数料	100,000	5,220
予備費	1,631,705	0
合 計	3,756,705	1,346,781

次年度繰越金 (立命化友会予算へ) 2,409,308

特別会計

収入の部	予算額	執行額
前年度繰越金	4,635,778	4,635,778
拠出金	0	0
雑収入	1,000	0
合 計	4,636,778	4,635,778

支出の部	予算額	執行額
人件費	250,000	186,000
事務局費	100,000	155,609
予備費	4,286,778	0
合 計	4,636,778	341,609

次年度繰越金 (応化会基金 (仮称) へ) 4,294,169

立命化友会 2012 年度 (平成 24 年度) 事業計画

I. 諸事業

1) 2012 年 3 月卒業生名簿作成	2012 年	5 月 ~
2) 在校生ソフトボール大会	未定	
3) ニュース発行	2012 年	11 月 1 日
4) 全会員への通信	2012 年	11 月
5) 卒業・修了パーティー	2013 年	3 月 20 日
6) ゴルフ懇親会の開催		
・第 29 回	2012 年	10 月 25 日
・第 30 回	未定	
7) 立命化友会ハイキングの開催		
・第 24 回	2012 年	4 月 29 日
・第 25 回	2012 年	11 月 25 日
8) 釣り天狗クラブ		
・第 3 回	2012 年	5 月 19 日
・第 4 回	未定	
9) 温泉研究会		
・臨時幹事会	2012 年	6 月 11 日
・第 3 回	未定	
10) 特別企画セミナー	2013 年	2 月 (予定)

II. 諸会議

幹事会		
・第 1 回	2012 年	6 月 17 日
・第 2 回	未定	
企画運営委員会	未定	
ニュース編集委員会		
・第 1 回	2012 年	7 月 1 日
・第 2 回	2012 年	9 月 15 日

III. 支部活動

(関東支部、東海支部、中国・四国支部) 未定

2011 年度 (平成 23 年度) 立命化友会決算

収入の部	予算額	執行額
前年度繰越金	0	0
会費 (一般)	0	6,000
会費 (学生)	3,150,000	3,150,000
寄付金	10,000	0
雑収入	1,000	20,022
合 計	3,161,000	3,176,022

支出の部	予算額	執行額
総会開催費	1,200,000	1,159,918
事業等補助金	50,000	61,025
地域別活動推進費	150,000	0
会議費	50,000	23,677
印刷費	100,000	3,316
郵送費	500,000	6,960
人件費	500,000	318,000
事務局費	125,000	240,229
雑費	100,000	0
拠出金 (連絡協議会へ)	150,000	150,000
在学生活動援助費	300,000	300,000
振込手数料	100,000	1,015
予備費	136,000	0
合 計	3,161,000	2,264,140

次年度繰越金 911,882

2012 年度 (平成 24 年度) 立命化友会予算

(単位: 円)

一般会計

収入の部	予算額
前年度繰越金	911,882
応化会 2011 年度繰越金	2,409,308
会費 (学生)	3,000,000
寄付金	10,000
雑収入	1,000
合 計	6,332,190

支出の部	予算額
総会開催費	0
事業等補助金	150,000
地域別活動推進費	250,000
会議費	150,000
印刷費	500,000
郵送費	700,000
人件費	1,000,000
事務局費	250,000
雑費	50,000
拠出金 (連絡協議会へ)	150,000
在学生活動援助費	300,000
振込手数料	10,000
予備費	2,822,190
合 計	6,332,190

応化会基金 (仮称) 4,294,169